



TITLE:

花山通信 : 夢を喰ふ者

AUTHOR(S):

花山子

CITATION:

花山子. 花山通信 : 夢を喰ふ者. 天界 1932, 12(132): 160-160

ISSUE DATE:

1932-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161894>

RIGHT:

花 山 通 信

【夢を喰ふ者】

九州の向ひ側で、花火が上つとるなどゝ云つたら、實に不とゞき者で、貴様には、大和魂があるか！⁷ つて大目玉を喰ふだらうが、其處がソレ人間と云ふ哺乳類は實に、勝手なものでネ……。全く安全な處から、上海の戦線を觀望したいと云ふ人がないではない。そう云ふ人のためには、是非ロケットが必要で、手頃の望遠鏡を一挺はり込んで、ドンドン月の世界へ行つたらいゝ。あそこは、空氣がないから、何倍でも、思ふだけ倍率がかゝつて、しかも、理想的にいゝ像が出来るから、上海位は手に取る如く、見えるであらう。但し、地球には、雲が往來して、一寸ハガユイかも知れないけれど、其れならば赤外線寫眞を利用すれば足る。もう、そろそろ軍の司令部が、月の世界のコペルニクス山頂に移つてもいゝ時分だ。併し又、三年住めば都とやらで、どうしても、地球を離れるのが嫌だと云ふ駄々つ子は、仕様がなから、九州の長崎あたり迄出かけるがいゝ。其處で、大空へ大きな氣球を擧げて、數百倍の倍率を有つた望遠鏡をのぞいて、所謂、對岸の火事を觀望するのである。

此れはロケットよりも簡單で、もし誰方か、此の方法を用ひて、一回幾らかづゝの木戸錢をお取りになれば、其の元手は直ぐ上つてしまふだらう。實際夢の様な話だが、そもそも、身を全く安全にして今回の上海を眺め様と云ふ御注文が夢の様なものだから我慢してもらふとしよう。

夢の話をした序でにもう一つ。一寸先は夢の様、「人間萬事塞翁が馬」とかで、明日の事を云ふのは夢だから、今から、四年も後の事を云ふのは、夢の夢の夢の夢の夢……で、息がつゞかん様になつてしまふ。何はともあれ、頃は1936年6月19日、所は北海道で日蝕があつて、太陽が晝間かくれてしまつて、紅焰とコロナが見える……位は、皆さん御存じの事と思ふが、此間其の筋から便りがあつて、其の皆既時間は約2分程度、皆既の中心線は、枝幸、稚内根室の極く近くを通ることが解つた。どうしても其時迄に死なねばならない人は此の世のはかない夢とあきらめるより仕様もないが、死んでも見たいと云ふ人は、今から北海道へ行く準備をして置きなさい。